

実践活動に基づく卒業研究の検討

久保田 尚・松本 清治・岡村 吉永・霜川 正幸

An Analysis of Student's Senior Theses Based on Their Practical Activities

KUBOTA Takashi, MATSUMOTO Seiji, OKAMURA Yoshihisa, SHIMOKAWA Masayuki
(Received January 7, 2014)

キーワード：実践活動、卒業研究、教員養成、小学校教育コース

はじめに

職に携わる要件として免許が必要なことから明らかなように、学校教員は、いわゆる高度専門職業人として位置づけられ、教育指導に必要な知識・理解はもちろんのこと、教育的情熱や使命感といった人間性も求められている。教員免許更新制度¹⁾が導入されるなど、教員免許に対する考え方に変化もみられるが、これは教員という職能に関わる社会的な要請を受けたものであり、教職の重要性が揺らぐものではない。こうした教員を養成する機関である教育学部もまた、社会的な要請に応えるための不断の努力が欠かせないといえるだろう。

前述の教員免許更新制度をはじめ、近年の教員養成ならびに教員研修に強い影響を与えたのは平成18年の中央教育審議会答申（以下、答申²⁾）であり、この中では専門職大学院である教職大学院や養成教育の最終段階としての教職実践演習についても提言がなされている。これからの時代を生きていく教員に何が求められるのか、そういったことが意識された答申といえよう。

平成21年度に新設された山口大学教育学部の小学校教育コースは、この答申（中間報告³⁾を含む）がコース設計に強く反映されており、その成果として漸く昨年度末に第1期生を送り出すことができた。これを機会に、コースが力を入れる実践活動がどのように学生の成長に生かされたのか、実践系の卒業研究を対象に考察を加えることにする。

1. 小学校教育コースにおける卒業研究の考え方

小学校教育コースでは、コースのGP（表1参照）とコースが設定するカリキュラム（コース指定科目及び共通教育を含む⁴⁾）が明確な対応をなしており、この履修によって、基本的にそのGPが達成されるものと考えられる。卒業研究は、このコースカリキュラムの根幹を成す3つの系を基盤として、各学生がその興味・関心、課題意識に応じた学びを深化・発展させるもので、学部生活全体を通じた学びの集大成として位置付けられる。卒業研究の実施にあたっては、3つの系のうち1つを中心的な主題として設定し、各系の特徴や性格等に沿った研究を行い、論文として完成させるものとしている。

3つの系がそれぞれ対象とする主な研究内容は以下の通りである。

（子ども理解系）：教育学や心理学等に基づいた、子どもの発達の理解に関する研究。

（学習指導系）：教育方法ならびに教材開発に関わる研究で、特定の教科等の指導に関わる研究を含む。

（協働実践系）：教育を軸に、社会における成員としての個、あるいは教員や学校の在り方等に関する研究

表 1 小学校教育コースの G P

小学校教育コースの Graduation Policy	
	以下の事項について、基礎的な資質・能力を備えていること。
(子ども理解)	1. 人間の発達について系統的に理解するとともに、教育に関する実践や理論を踏まえ、効果的な教育指導の在り方について考察することができる。
(学習指導)	2. 子どもの実態を総合的に理解し、目標、課題等を明らかにした上で、創意工夫しながら適切な教育指導を行うことができる。
(協働実践)	3. 同僚や保護者、地域の人々と連携・協働し、多様な場面における子どもの教育指導を、総合的かつ創造的に実践できる。

2. 卒業研究着手までの流れ

平成21年度入学の第1期生を対象として、コース教員が合議して作成した小学校教育コースにおける卒業研究着手までの流れを図1に示す。第1期生の場合、参考あるいは手本とするべき上級生がおらず、卒業研究についてのイメージが全く持てないという実態があったため、2年次後期の早い時期から卒業研究の考え方や方法に関する全体指導を行い、研究内容や所属するゼミについての第1次希望調査を行っている。

補足となるが、指導する教員側にとっても、兼任する元の所属教室によって卒業研究に対する考え方や指導方法が大きく異なっていたことから、こうした卒業研究指導に関わる流れを整理し合意を図っておくことが、コースとして指導の一貫性を保つために重要かつ避けられない作業であった。

実際に卒業研究に向けた指導は3年次前期からで、多様な学びと経験をさせつつ、小学校教員としての専門性を高めるという観点から、小学校教育コースのカリキュラムの柱である3つの系から2つを選択し、該当のゼミに所属させるようにしている。これは卒業研究を開始するための準備期間として位置づけられ、この後3年次後期（12月）に正式に所属するゼミ（指導教員）を1つに決定し、4年次全体を通して卒業研究を実施する。なお、4年次において卒業研究の認定が検討中となっているが、これは図1の作成が平成22年前期であったためで、実際は卒業研究発表会を開催し、最終的に教員会議において判定を行っている。

卒業研究の流れ

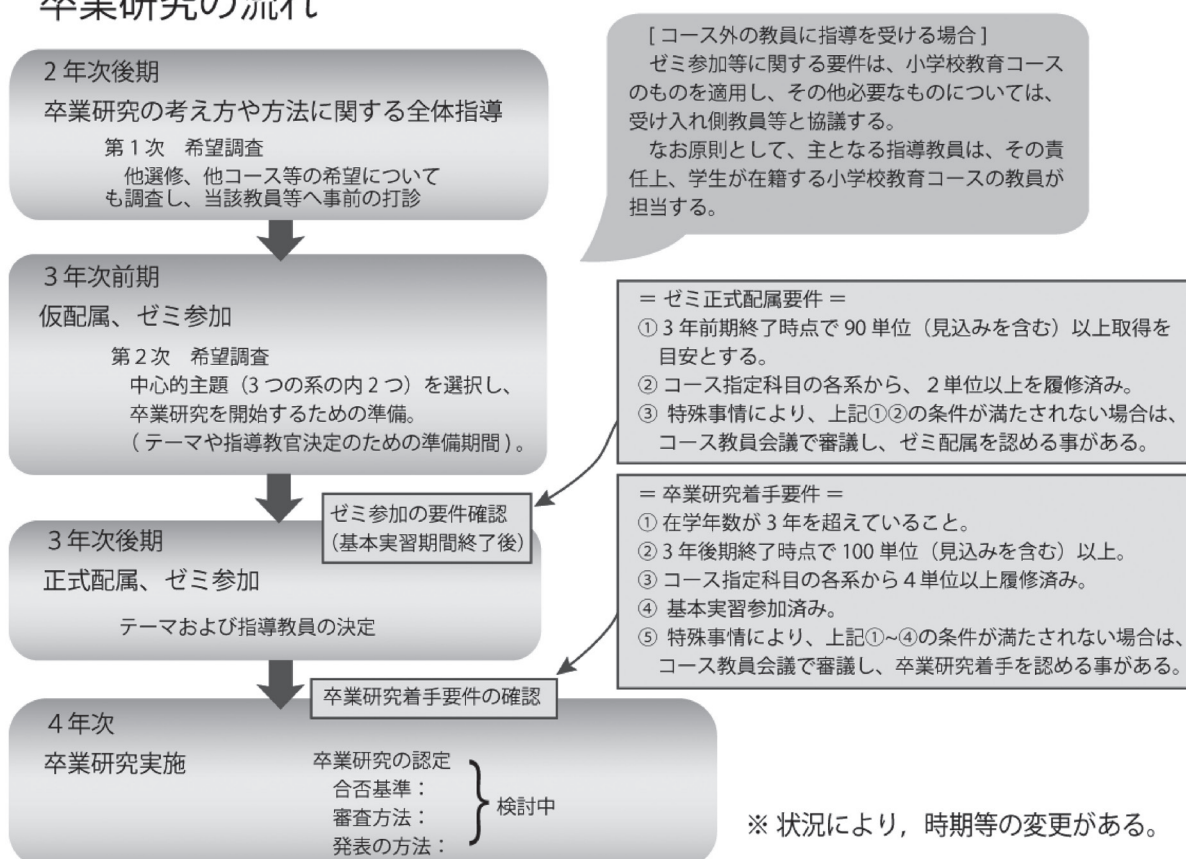


図1 小学校教育コースにおける卒業研究の流れ（第1期生対象）

また、1学年の定員が30名と教育学部で最多であることから、3年次のゼミ配属、4年次の卒業研究着手について、その要件を明確にし所属学生に周知するようにもしている（図1参照）。

3. 学生の実践活動と卒業研究

3-1 学生の取り組む主な実践活動

小学校教育コースでは、教員としての実践力を高めるために「地域で育ち、地域に貢献できる教員の養成」を目指して、協働実践系科目を軸に、学校あるいは地域での体験活動を積極的かつ計画的に展開している。表2は、協働実践系に所属した学生が参加した主な実践的活動を卒業論文において整理したもので、本報告用に筆者が補足説明など若干の手を加えている。まず入学直後の5月、授業（協働実践基礎）の一環として、近隣の児童とともに街路樹に名札を付けるというケヤキプロジェクトを実施した。入学間もない時期に子どもと交流する活動を準備、運営する難しさはあるが、4年間を振り返ると、出発時点で子どもの実態に触れ

表2 入学から卒業までの主な活動（協働実践系ゼミ学生）

2009年度（大学1年）	
4月	山口大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コースに入学する。
5月	ケヤキプロジェクト ～ケヤキの木に名前をつけよう！～ (大学近隣の地域ならびに小学校児童との交流事業、協働実践基礎)※
6月	平川小へ授業見学に行く。(基礎セミナー、協働実践基礎)※ 湯田小へ授業見学に行く。(基礎セミナー、協働実践基礎)※
10月	小研萩合宿、科学の祭典 (萩市教育委員会、長州科楽維新塾他と協働)※ ベンチ作りプロジェクト開始(大学体育館横の公園に設置)※
11月	チューター活動開始(平川小学校) 保育ボランティア開始(平川幼稚園)
2010年度（大学2年）	
5月	チューター活動開始(秋穂小学校) 「教職協働実践Ⅱ」にて、初めて導入15分間の模擬授業を行う。 参加実習A(山口大学教育学部附属特別支援学校)
10月	小研萩合宿、科学の祭典 参観実習1(山口大学教育学部附属光小学校) 参観実習2(山口大学教育学部附属山口小学校)
12月	クリスマス会(富田東) (影絵やハンドベルの公演)※ クリスマス会(秋穂) ()※
2月	冬期公開授業研究会(山口大学教育学部附属山口小学校)
2011年度（大学3年）	
4月	IYFP参加(阿東町立生雲小学校との連携によるフレンドシップ事業)※
7月	チューター活動(白石小学校) (協働実践系の仮ゼミとして参加。5年1組に入り、担任と子どもとの関わりを見て学んだ。)※
9月	後期教育実習(基本/山口大学教育学部附属山口小学校2年生)
12月	クリスマス会(秋穂、富田東) 冬期公開授業研究会(山口大学教育学部附属山口小学校)
2月	やまぐち教育セミナー参加
2012年度（大学4年）	
4月～現在	チューター活動(山口大学教育学部附属山口小学校) (卒業研究として参加する。附属山口小学校研究学生という名目で月、木の2回通う。)※
5月	前期教育実習(委託/周南市立今宿小学校2年生)
9月	後期教育実習(オブション/山口大学教育学部附属幼稚園5歳児)

- ・協働実践系学生が卒論に記した活動記録から、実践に関わる内容を抜粋した。
- ・右肩に※を付した括弧書きは、学生の記述をもとに筆者が注を加えた。
- ・ゴシックは、小学校教育コースとして行う実践活動。
- ・下線部は、教育学部が行う教育実習。網掛けは、協働実践系のゼミとして行った学校での実践活動。

課題意識を持てたことは、小学校教員を目指す学生にとって意義が大きかったようである。諸般の事情でこの行事は一旦停止したが、平成25年度より、附属幼稚園ならびに附属特別支援学校と協働するザリガニプロジェクトとして再開し、次年度以降も継続の予定である。さらに続く6月には、近隣小学校での授業参観を実施した。これもコース授業の一環として行うもので、授業参加の前に学校でのマナーやルール、安全に関する配慮、授業観察の仕方について基礎的事項の指導を行っている。卒業生ならびに在學生によれば、入学当初から教員の視点で学校や子どもをみる機会を持てたことは、教員を目指す学生としての意識が高められ、その後の実践活動に主体的に取り組むきっかけとなったとのことである。

全体的な活動は表2に示す通りであるが、小学校教育コースでは、学年が上がるにつれてコースとして取り組む実践活動から、学生が主体的かつ自主的に取り組むものへと移行していることが理解されよう。学生によって開始する時期や活動内容は異なるが、1年次後半頃から少しずつ学校チューターなどに参加しはじめ、2年次以降は週1回から2回程度、学校に入って授業補助などに参加する学生が多い。特に協働実践系所属学生では、コースが連携する3つの小学校（附属山口小学校、山口市立湯田小学校、山口市立白石小学校）から1つを選び、4年生をリーダーとした3～4人程度のチームで学校に関わり、この記録を基に卒業研究を進めるため、参加の質や頻度がより重要となっている。

3-2 協働実践系所属学生の卒業研究

3-2-1 協働実践系における卒業研究の意味と指導体制

協働実践系ゼミでは、図2に示すように「4年次の4月から翌年の1月までの期間、小学校にチューター（学習支援）として参加し、この間に学級で見たことや感じたことを児童や教師、学校行事等に焦点を当てて整理する。3年次（仮ゼミ期間）は、4年生をリーダーとするチームの一員として学校での活動に参加し、児童との接し方や観察の視点を学ぶとともに、教育実習等で4年生が学校に入れない場合の観察を代行する。協働実践系では、児童や教師の様子について、そこで起きている事象を学生自身の目で捉え、それを解釈していくため、卒業研究着手以前の3年次にどこまで観察者としての見方や感じ方を向上できるかが、卒業研究の重要なカギとなる。

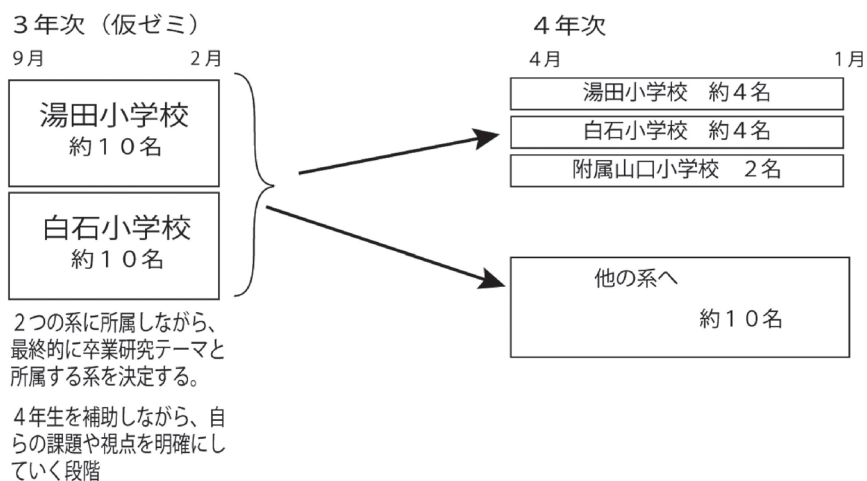


図2 協働実践系での卒業研究の流れ（実践活動を行う学校）

すなわち協働実践系では、卒業研究を通じて「子どもを観察する力や学級で起きている事象を捉える力を向上させ、教員としての実践力を支えるレベルにまで高める」ことを目指し、学術的な研究というよりも、教師として出発するための実践基盤を確かなものにするに重心を置く。協働実践系では、「君たち自身が研究資料であり、参考文献だ」という言い方を学生にするが、これは実践者であり観察者である教員としての力量を高める必要性を例えたものである。

つぎに指導体制であるが、協働実践系の卒業研究では、上述した考え方にに基づき、学生一人ひとりを複数の教員で指導するようにしている。最終的には主となる指導教員が方向性を示すことになるが、学生が観察してきたものを、できるだけ多様な視点で考察し、学生とともに意味を見出していく作業を大切にする。この

過程で、指導する教員が新たな学校課題に気づくことも少なくない。

3-2-2 卒業研究の内容

小学校教育コースの1期生（平成24年度卒業生）29名の内、協働実践系に所属した学生の卒業論文題目を表3に整理する。いずれも小学校で学習支援活動等を行いながら意識に残った内容を記録し整理したもので、発見ノート⁵⁾で培ってきた力がこの記録と省察の基盤になっている。

表3 協働実践系（1期生）の卒業論文題目

<ul style="list-style-type: none">・子ども（遊び）と健康・体力の関連性・音楽活動を生かした学級づくりについて・教員のストレスの原因と改善に関する研究・学校教育における道徳場面の調査・目立つ子供の目立つ行為について ～一年児童の観察を通して～・子どもがやる気を出すための有効な教育支援の検討 ～ほめる行為と子どもの変容～・学級経営における教師と子どもとの関わり・特別支援学級と通常学級の連携・子どもの変容を目指す保護者と教師の連携 ～学級担任、補助教諭や保護者の思いを生かす「学生チューター」としての支援のあり方～・学校行事がもたらす子どもの変容
--

以下では、いくつか卒業論文の記述を取り上げ、協働実践系での学びを具体的に紹介する。

記述1は、ある学生の論文冒頭で、協働実践系で行う卒業研究の概要を簡潔に表したのになっている。学校や学級の様子によって学生が活動できる期間に多少の違いはあるが、大凡どの学生も4月当初から論文提出締切直前まで、週に2日から3日のペースで学級（1つの学級を対象にする場合と同学年の複数学級を対象にする場合がある）を観察し、それぞれのテーマに沿って内容の整理と分析を行っている。

記述1

「学級経営における教師と子どもとの関わり」という題目を掲げ研究に取り組んだ。2012年4月、学級開きの日から約10ヵ月の間、あるクラスの子どもたちと関わり、学級の様子を観察し続けた。子ども一人ひとりの個人的な成長だけでなく、集団としての成長や、徐々に私との関係が深くなる様子も見られる。第3章 観察記録にはその様子も書いている。教師の言い回しや子どもの発言にも注目しながら変容を見ていきたい。
--

記述2は、大学入学時から3年次までの発見ノートを整理し、学校教員のストレス状況に関心を持って卒業研究に取り組んだ学生の記述である。こうした課題意識をもとに、この学生は5段階のストレス指標を作成し、平成24年の5月15日から12月18日まで、計61日間におよぶ観察を行い、曜日や学校行事、子どもとの関わりなどと教員のストレスとの関連を整理した。学生の主観でストレス度を評価しているとはいえ、全体で466回ものストレス場面の記録があり、資料性の高い卒業研究となっている。例えば、記述3は、曜日によるストレスを分析する中で気づいたもので、学校経営上有用な示唆を含んでいる。

記述2

平成21年5月から平成23年12月までの活動を通して、それぞれの活動の重要な部分にアンダーラインを引いてみた。すると、教員や筆者自身が子ども理解、学習指導や生活指導等において悩んでいる様子が窺え、子どもとの関わり方がストレスに関係があるように感じられた。

記述3

水曜の午後はどの曜日の午前・午後よりも教員ストレス感知頻度の平均が高くなっている。職員会議の開始時間に合わせて、多くの用務をこなさなければならない教員の心理的な焦りがストレスになっていることは否定できないようである。
--

また記述4は、休憩時間における子どもの過ごし方に関心を持って観察した学生のものである。子どもの実態に触れて気づいた内容であり、直後に教員として教壇に立つものとしての意識の高まりが伝わる。

記述4

子どもたちの遊びがパターン化しているのは、子どもたちが遊びを知らないからともいえる。子どもたちはどのような遊びが好きで、どんな遊び方をしているのか、教師が把握し、新しい遊びや遊び方を教えていくことも必要だろう。すぐに子どもの遊びが変化するとは思えないが、そのきっかけづくりは欠かせないと考えられる。

記述5は観察記録の一部で、ある5年女児の変化に気づいた学生が、担任に理由を尋ねた内容になっている。週2回のペースで学級に関わることで子どもの変化に気づく事ができるようになり、またその理由を担任に問える信頼関係も醸成できている。教員に必要な実践力の一部であり、実践活動を卒業研究にまとめる効果の一つといえよう。

記述5

授業をととても熱心に受けることができるようになったり、筆者に対して柔らかく接することができるようになったりと、女児Bなぜこのように変わることができたのか先生に聞いてみると、「女児Bと女児Bのお母さんと三者面談をしたとき、今までの様子(良くなかったこと)をそのまま隠さずにお母さんに伝えた。女児Bは変わりたいと感じていたので、お母さんも協力して一緒に変わろうとしてくれている。」という話を聞いた。教師と保護者の信頼関係は、心強いものであり、児童を良い方向に変える力を持つと感じた。

おわりに

実践力の高い小学校教員の養成を目指して新設された小学校教育コースもついに第1期生を卒業させ、階段を一つあがったといえるだろう。とはいえ、教員に求められる実践力そしてその評価については曖昧な部分が多く、真価が問われるのはこれからである。そのためにも、卒業生が実際に学校現場で評価を受け、さらにその結果を学部教員養成に還元する仕組みが作られていかななくてはならない。

その意味では、本報告も、実践活動をどう卒業研究にまとめていくかについて具体例を示したに過ぎない。我々指導教員にとっても新たな試みであり、今後も反省と工夫を凝らしながら手探りで進めて行くしかないというのが実情である。その中で実践活動の質や方法をどう評価するのか、果たして本当に力量形成はなされているのか等、資料を蓄積しながら検討を加えていく必要があるだろう。

最後に、小学校教育コースの学生達を支えて頂いた多くの関係者の皆様、とりわけ附属山口小学校、湯田小学校、白石小学校の教員、児童の皆様に対し、心からの感謝を申し上げる。

なお、本研究の一部はJSPS科研費23501149を受けて実施したものである。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/index.htm
- 2) 中央教育審議会：今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申），（2006）
- 3) 中央教育審議会：今後の教員養成・免許制度の在り方について（中間報告），（2005）
- 4) 岡村吉永，霜川正幸，久保田尚，松本清治：教員としての実践力を高める教員養成の試みー小学校教育コースの設計と4年間の歩みー，山口大学教育学部論叢，第62巻第3部，73-80（2012）
- 5) 霜川正幸，西岡尚，岡村吉永，鷹岡亮：実践的学びを省察する「発見ノート」とその活用事例，山口大学教育学部論叢，第59巻第1部，53-60（2009）